

## 審査の結果の要旨

氏名 佐藤 一子

生涯学習社会の設計が世界的課題になって以来個別領域の研究は進んでいるが、生涯学習社会に至るプロセスの全体像を明らかにしようとした研究はきわめて少ない。本論文は近代イタリア社会を協働的な学習社会ととらえる観点から、著者が30年かけて文献調査と現地でのインタビュー調査を継続し、これを現代的な学習社会論の観点によってとらえかえしながら一つにまとめた日本で初めての包括的なイタリア生涯学習社会研究である。

本論文は6つの章に序章と終章がつく8章から構成される。序章で、本論文全体に関わる成人教育や生涯学習概念の理解と先行研究の現状、そして明らかにすべき課題と方法について述べた後、第I章では、イタリアには歴史的にアソチアツイオニズモと呼ばれる社会連帯的な民衆教育のネットワークがあったことを確認し、それが近代史に通底する前提条件を形成していることを述べた。第II章では、第二次大戦復興期のとくに南部の非識字者や小学校未修了者に対する成人教育政策の立ち後れについて述べたうえで、二つの民間団体が果たした成人教育運動が大きき力をもったことを述べた。第III章では、ユネスコの生涯教育論、OECDのリカレント教育論などの影響を受けて、1970年代以降、労働者の学習権運動に焦点をあてた国民的な運動が起こり、労働組合の全国組織、大学、州政府、地方自治体が義務教育未修了労働者への学習プログラムの提供に取り組んだことを述べた。

続く第IV章は、アソチアツイオニズモが現代化されるプロセスを3つの民間団体の教育文化事業の展開過程を通じて検討した。第V章では、地方分権化のなかで地方自治体が、職業訓練と成人教育を統合し体系化するとともに、市民と協働化する政策を積極的に採用していることを、現地調査を交えながら検証した。第VI章では、引き続いて雇用問題が社会的な重要課題になる1990年代以降において、EUの生涯学習戦略のもとで学校改革、職業訓練機関の拡充、高等教育レベルの高度技術教育の検討が進められたことを述べた。最終章では、これらを総括し、イタリア学習社会の歴史像をまとめ今後の課題を提示した。

19世紀後半の近代国家成立にも関わらず、イタリアはその国家的な紐帯の脆弱さが常に指摘されてきたところであるが、著者は、社会の基層に家族、職場、地域をベースにした相互扶助と協働的な学習システムがあることを見だし、これが1970年代以降に地域成人教育政策として制度化され、さらに1990年代以降はEUの生涯学習戦略の枠組みのなかで実質化されていった過程を丹念に検証した。本論文は、現地での長年にわたるインタビュー調査をもとに、近代イタリアの社会的特性を踏まえ、識字教育、成人教育、文化運動、雇用支援といった政策領域を横断的に検討して、マクロな視点から像を結んだ研究であり、その精緻な記述も含めて、博士（教育学）を授与するのに十分な内容をもっていると認めることができる。